白金葭

平成二十三年五月発行　第三号

白金葭月例句会案内

・六月十七日(金)　12：00～15：00
兼題：薫風、紫蘇、を含む五句
アビスタ第五学習室(我孫子駅より南へ徒歩十分)
七月十五日(金)12：00～15：00(アビスタ第一和室)
兼題：昼寝、松葉牡丹
八月十五日(月)9：30～11：00小池ボート乗場より蓮見舟吟行。12：00～15：00(アビスタ第五学習室)
兼題参考句（6月17日分）

薫風

ひょうたんの穴へも通り風薫る　松浦礼子
観覧車はいつも水平風薫る　杉本かずみ
写生子の向きそれぞれに風薫る　松崎早智子
風薫るめん鶏をん鶏烏骨鶏　甲斐幸子

紫蘇

紫蘇しげるなかを女のはかりごと　桂信子
紫蘇壺を深淵覗くごとくする　山口誓子
なみだつぶ空より下は紫蘇畑　岩尾美義
紫蘇濃ゆき一途に母を恋ふ日かな　石田波郷

月例句会報（11／5／20）投句14名）

思い出すゴッホの油絵麦の秋　窪田空華
公園の空せばめたり鯉幟
新緑に目の洗はるる読書かな
芍薬の花の揺れゐて風ならず
前栽に十二単衣の華やげる

明易しゃ(ばい)の謎解くピタゴラス　嘉悦圭三
冥海(めいかい)の霊(たま)安らかに鯉幟
弓を射る音の発止や初蝶来
岬山は枇杷の熟るるに日を集め
麦秋や幟はためく関が原

つつじ花濡れ落ち重なる石の上　小山陽也
七十余アオキの雌雄と覚えたり

薫る藤 眺めてあとは船 橋 屋
梨 の花 静 かに咲 け り 塀 の 内
棕櫚の花尺余の舌と垂れ下がり

麦 秋を抜ければ被 災 の潮 来 町
麦 秋やくさめひとつで刈られ行く
鯉のぼりこごんで見ている筑 波 下
砂 噴 いてペルー来 航 以 来 かな
みどりの日手洟は片手にて済ます

青木啓泰

地震 以 後 金 魚 驚 き 浮 いて 来 ず
メトロ出 て 半 纏 木 の 花 仰 ぐ
香 水 のほのかに匂 ふ 遺 稿 かな
鯉 幟 溌 剌 トタン屋 根 なれど
緩 やかに阪 東 太 郎 麦 の 秋

佐藤宏之助

麦 秋 の 兵 の 髯 面 馬 の 鼻
へうへうと風の吹くなり浜昼顔
麦 秋 の 孫 と 並 んで 嗽(うがひ) せる
鯉 幟 瓦 礫 の 上 に 泳 ぎけり
男 等 やリズ・テイラーの薔 薇 の 渦

飯田孝三

牛 の 額 いくつも 光 り 桃 は 実 に
かの日昼 鳴 きて 飛 びたる 雉 いくつ
梨 の 花 交 配 しつつ 遠 き 地 震
透 きとほる風 のはらわた 鯉 幟
紙 飛 行 機 空 にとどまる麦 の 秋

増田陽一

カステラの切 り 口 乾 く 春 の 昼
鯉 のぼり津 波 の 跡 を 泳 ぎけり
麦 秋 や 白 き 帽 子 の 見 え 隠 れ
異 国 め く 春 灯 暗 き 東 京 は
天 心 の 六 角 堂 失 せ 春 怒 涛

増田悦子

しろみ そら

麦秋やバックミラーに郵便夫
村の子はみんなの宝鯉のぼり

光成高志

四万十川を渡ればひらふ翻翻と
大利根川の土堤に堰かるゝ麦の秋
ランドセル縁に放りて麦の秋
スカートの自転車通る麦の秋
工場の朝の挨拶鯉幟

吉羽多美子

駅長の大きな欠伸遠蛙
韮の花猫の住みつく観音堂
鯉幟からから乾く剣道着
麦秋を鏡に映し理髪店
浅草に人形焼を傘雨の忌

光成敏子

六百の遺児に掲げる鯉幟
老齢のオラウータンも春に逝く

麦秋や「利根川図志」は蔵の中
鐘の鳴るねむの木学園五月来る
家普請の音やむ夕べ蛙鳴く

黒田彰一

青畳めく田植機の植田かな
麦秋やプロ野球では交流戦
津波痕これじゃ泳げぬ鯉幟
丑三つ時蚊の声出づる枕許
草食系男子卯波を越え行くか

飯塚トシ子

連れ立って麦秋の畦汽車ぽっぽ
小鰺刺会ふて浮腰立ち直る
桑の実に水をあげたい風の中
葭切や遠く鉄橋渡る音
鯉幟絡まりついた大真鯉

選句結果(数字は入選数)

3　麦秋の兵の髯面馬の鼻　孝三
3　麦秋やバックミラーに郵便夫　そら
3　駅長の大きな欠伸遠蛙　多美子
3　カステラの切り口乾く春の昼　悦子
3　鯉幟からから乾く剣道着　多美子
3　麦秋やくさめひとつで刈られ行く　啓泰
3　六百の遺児に掲げる鯉幟　敏子
2　工場の朝の挨拶鯉幟　高志
2　地震以後金魚驚き浮いて来ず　宏之助
2　韮の花猫の住みつく観音堂　多美子
2　鯉のぼり津波の跡を泳ぎけり　悦子
2　公園の空せばめたり鯉幟　空華
2　麦秋を鏡に映し理髪店　多美子
2　棕櫚の花尺余の舌と垂れ下がり　陽也
2　溟海(めいかい)の霊(たま)安らかに鯉幟　羊三
2　みどりの日手洟は片手にて済ます　啓泰
2　スカートの自転車通る麦の秋　高志
2　明易しｮの謎解くピタゴラス　羊三
2　かの日昼鳴きて飛びたる雉いくつ　陽一
1　芍薬の花の揺れゐて風ならず　空華
1　へぅへぅと風の吹くなり浜昼顔　孝三
1　葭切や遠く鉄橋渡る音　トシ子
1　岬山は枇杷の熟るる日を集め　羊三
1　ランドセル縁に放りて麦の秋　高志
1　梨の花静かに咲けり塀の内　陽也
1　青畳めく田植機の植田かな　彰一
1　牛の額いくつも光り桃は実に　陽一
1　麦秋や白き帽子の見え隠れ　悦子
1　麦秋や「利根川図志」は蔵の中　敏子
1　緩やかに阪東太郎麦の秋　宏之助
1　弓を射る音の発止や初蝶来　羊三
1　思い出すゴッホの油絵麦の秋　空華
1　梨の花交配しつつ遠き地震　陽一
1　鯉のぼりごごんで見ている筑波下　啓泰
1　麦秋の孫と並んで嗽せる　孝三
1　異国めく春灯暗き東京は　悦子
　鐘の鳴るねむの木学園五月来る　敏子
　麦秋やプロ野球では交流戦　彰一
　鯉幟溌剌トタン屋根なれど　宏之助
　薫る藤眺めてあとは船橋屋　陽也
　浅草に人形焼を傘雨の忌　多美子

連れ立って麦秋の畦汽車ぽっぽ　トシ子
津波痕これじゃ泳げぬ鯉幟　彰一
七十余アオキの雌雄と覚えたり　陽也
新緑に目の洗はるる読書かな　空華
香水のほのかに匂ふ遺稿かな　宏之助

大利根川（おおとね）の土堤に堰かるゝ麦の秋　高志
男等やリズ・テイラーの薔薇の渦　孝三
小鯵刺会ふて浮腰立ち直る　トシ子
草食系男子卯波を越え行くか　彰一
桑の実に水をあげたち風の中　トシ子
村の子はみんなの宝鯉のぼり　そら
丑三つ時蚊の声出づる枕許　彰一
つつじ花濡れ落ち重なる石の上　陽也
家普請の音やむ夕べ蛙鳴く　敏子
透きとほる風のはらわた鯉幟　陽一
天心の六角堂失せ春怒涛　悦子
メトロ出て半纏木の花仰ぐ　宏之助
麦秋を抜ければ被災の潮来町　啓泰
前栽に十二単衣の華やげる　空華
四万十川（しまんと）を渡ればひらふ翩翻と　高志

老齢のオラウータンも春に逝く　敏子
鯉幟瓦礫の上に泳ぎけり　孝三
鯉幟絡まりついた大真鯉　トシ子
麦秋や幟はためく関が原　羊三
紙飛行機空にとどまる麦の秋　陽一

一句鑑賞

梨の花交配しつつ遠き地震　飯田孝三　陽一

梨はバラ科落葉果樹。棚作り、花は目交、手の届く枝々に数個づつ集まって咲く。「地震」は先の巨大地震の余震だろう。二ヶ月を経、余震も漸く間遠、本震紛いから体感する程の揺れが主になった。「遠き」は震源からの隔たりとこの間の推移をいう。楚々とした白色五弁の花びらが遠い地震と微妙に響き合う。ほつとし乍らも、悪夢再来の戦きを花と頒つのである。交配はいのちを継ぐ作業。老若三万もの震災犠牲者が報じられる時、さりげなく、蔵するところの殊更深い句だ。

牛の額いくつも光り桃は実に　光成高志　陽一

桃の産地は岡山、山梨、福島、山形などが思い浮かぶ。掲句は福島の牛と桃と見た。置き去りにされた牛の額がいく

つも光っている。桃畑の桃は実をつけてきている。この美しい皐月の風薫るいい季節に、人間どもは何をしているのか。おとなしい牛に叱られているのだ。無論、人災の放射能汚染によって立ち退きを強いられた村人の牛たちのことである。私は掲句に接して、食肉工場の玄関横に畜魂碑があること、牛と深彫りした牛碑の前で遊んだこと、鯨墓にお参りしたことなどの思い出が甦った。

黒田彰一

異国めく春灯暗き東京は　悦子

作者の目に浮かぶ異国とは何処だろうと想像した。句会で私はディック・ミネの上海を思い出すと言った。彼は第二次世界大戦中、官憲の目をそらすため上海租界でジャズを歌っていたそうだ。戦後のヒット曲の一つは「夜霧のブルース」。「春灯暗き～」時もあったであろう。でも、作者は、三月の東日本大災害による節電に協力中の東京の夜が薄暗く見えたことを詠ったのである。換言すれば、少し薄暗くなった東京はロマンティックに感じて見えた。それを「異國めく」と表現したのであろうと思います。

光成敏子

棕櫚の花尺余の舌と垂れ下がり　陽也

ヤシ科の棕櫚は十五m級のものもある高木であり、屋敷には植えるものではないと聞いたことがある。根の張が相当なもので、処分しようにも植木屋が断るという。その棕櫚の根が根なら、花も花である。肉穂状花序を抽出し黄色の小花を無数につけて、花は魚卵のようで実に生々しい。尺余の舌と垂れ下がりには降参しました。延べ棒の如く一物仕立ての句は、読み手にとっては清水がすっと喉を下りる感じです。一物仕立ては土生重次が得意としていたようです。

青木啓泰

春暁や竈の匂ひ寝床まで　敏子（白金馆2号）

俳人の勘で言って癌の治療法は、藁粗朶類を燃やした時の煙のにおい、つまり「かまど」の匂いに在ると思うから、春は曙、春暁の寝床までそれを引っぱり込めるのは健康面で大丈夫。癌の治療法は煙のにおいにあり、春暁の惰眠は寝床にあり、俳句のDNAに予言あり。掲句なかなかおもしろい句。

ハガキ句第三報（０５／３／２３）

ロンドンに嗽石夢みる雛灯　孝三
荊妻のほのかに頬の雛祭　〃
雛の間に入るをためらひひとりの夜　妙子
南部なる梅の下水濁川　雨水
白梅の光に雨の細さかな　春美
大股に残雪踏みて瑞鳳殿　康子
春泥に足をとられゐて我となる　〃
一部屋の世帯はじめの蜆汁　高志
暁の皇居の森の雉の声　〃
爺婆の飾る雛となりにけり　敏子
春一番節穴多き農具小屋　〃

ハガキ句管見（第三報）　飯田孝三

春一番節穴多き農具小屋　敏子

「節穴多き」手柄。春風が聞え、節穴から差し込む日に、農具のあれこれや、人の動きまでもが目の当りだ。流派、傾向を越え、俳句が優れて季感の詩だということを納得させられる。そればかりか、「農具小屋」が、たかまる自然の息吹と人々の営みを暗示し、森羅万象と人間界を抱え込む、ふところの深い春の句となった。さらにいえば、小屋のうちを見せつつ、「春一番」で外に光景を展開させる。農具小屋の佇まいが見えるようだ。

一部屋の世帯はじめの蜆汁　高志

「世帯はじめ」だから若い夫婦の生活を詠った句だろう。「一部屋」は、当世流「ワンルーム」の謂だが、即ち、蜜月の昂り期をこえた新世帯の着実な日常の倖せがじんと伝わる。この句、当の若夫婦ではなく、親御さんの吟である。さりげなくてしみじみとした詠いぶりに、新世帯を見守る視線が籠り、情愛が滲む。「の」、「の」と継ぎ、結句「蜆汁」に収斂させる一句仕立てが一段と情愛を深める。ご自身の新婚の頃をふと思う。

暁の皇居の森の雉の声　高志

「の」音の畳みかけが、視覚を空間、地上、場所、小動物へと絞込み、「雉の声」で、一挙に聴覚に転換する。印象が際立つが、僕には作者のいる位置と、内側の思いが、いまひとつ分からない。（九段坂病院内で聞く。作者）

爺婆の飾る雛となりにけり　敏子

「なりにけり」の情懐が深い。ただ、「爺婆」はどうだろう。諧謔、自笑を見てとるが、情趣にそぐわない。

白鳥が八百飛来本埜村　　高志

漢字の象形性を活かし、映画技法を駆使したヴィジュアル俳句とは、先の(一号)鑑賞ですが、その後、この句を眺めていて感じたところを補足します。

「飛」は、とぶ鳥を象る(白川　静『字統』)が、「八百」を受け、その多画性が数の夥しさをイメージさせる。と同時に、「八百」は、「八」が白鳥の羽をひろげ降下する姿、「百」が躯の量感を彷彿させる。近遠の二重映写効果をもたらすのだ。それが、「来本埜村」の象形性とあいまって白鳥湖をとりまく冬木立をまざと眼前に繰りひろげる。(飛来の数として、八百の多少は不知。前言訂正します。ただし、それは本筋の論外)そして、見逃せないのが音調である。「は」行音と、「あ」母音の反復が羽ばたきに通い、又、空間を大きく取り込む。この句のめでたさと明るさは、「八百」の象形効果とこの音調からくるのだ。してみれば、臍は「八百」にある。

〈印旛沼の北西一帯は本埜村である。その村の田圃に白鳥が来ると云うので、毎年見に行っていた。平成になってから年々飛来数が増えて、平成十六年の暮には八百を越えた。翌年の寒入に現地で地主からそのことを聞いた。視点を大きくして、やさしく作ろうとして出来た句である。この鑑賞文によって、私の思いもよらず、いい句になっていることを実感できた。自然から出会い頭に授かる俳句があること、鑑賞されることによりその良さを知るのです。作者と読み手の交わりが出来る俳句はほんとに有難い詩と思います。作者記〉

お便り広場（到着順、敬称略）

前略、毎回吟行ではお世話になり有難うございます。此度白金葭の創刊号をお送りくださいまして御礼申し上げます。十六頁の中に俳句を中心として、内容の濃い鑑賞文等々あり、楽しみ且つ勉強しながら拝読させていただきました。三月十一日の大震災の日の吟行の折り、雑誌発行の企画があるとうかがい、どのような内容となるのかと楽しみにしておりましたが、期待にたがわず、読みごたえのある内容で発行者のお人柄識見が色よく反映されているように感じました。毎号拝見させていただき度く購読を希望いたします。私も時に小文をお送りいたし度く、その節はよろしくお願いいたします。以上御礼まで。草々

（H.23.4.12　伊藤一艸人）

いつの間にか若葉の季となりました。（中略）白金葭作品評作法内にて書かせていただきます。又、小生弱句「犬ふぐり」の句評好意ある評言ありがとうございます。田圃に水が張られると、すぐに蛙が鳴き出しました。また、異なものです。自然とは。不一（H.23.5.3青木啓泰）

「白金葭」二号拝受しました。私も丸十年手作りで、「彩」

を出しました。頑張ってください。体の方はラジウム温泉に通っていると、調子はすこぶる良いようです。三月十一日の地震は富士山の麓の方へ　水汲みに行っていた時に遇いました。

烈震の芽木に縋りて金縛り

それから震度六強の直下型の地震が三月十五日にありました。幸い皿・小鉢が割れたぐらいで済みましたが、これも強烈でした。

春の闇地震に踊れる皿小鉢

近所では屋根の瓦が大分割れたようです。なんとなく世情不安な世の中ですが、ご自愛の上ご健吟ください。御礼まで。（H．23．5．初旬　平野ひろし）

白金葭第一号を拝受しました。素晴しいですね。思った以上のものですね。今後ともよろしくお願い致します。定家の名月記の「紅旗征戎吾が事にあらず」を思い出しました。参加する人々のすごさに驚いています。

倒れたる灯籠傍目に松芽摘む

俗事多く甚だ申し訳ありません。（専門の技術者の心構えについての手紙は省略。）　（H．23．4．14小山陽也）

斉藤さんのご冥福をお祈りいたします・鬼澤

四月七日「白金葭0号を拝受感謝します。句会のご案内をいただき重々お礼申し上げます。何事も新しく出発するということは、大変な苦労だったと思います。貴兄の周囲には良き仲間がいます。より一層の発展を希望します。それにしても、斉藤さんの死は残念です。句会終わりました「バイさようなら」でなく、一時間でもより話がしたかったです。亡き師の頭の中には一杯宝物がつまっていたのではないかと思いました。残念です。悔いてもはじまらないことですが、私のように人間の裏表をみて来たものには、素直に話が出来ず、或いはご迷惑をかけているのではないか、そんな中で斉藤さんとは桜の時か蛙の鳴く季節か時間をかけ話がしたかったです。さて、同人誌投句したりすることが仲間に入る条件でせしょうか。少しの間「同人誌」を読むという同人に入れて下さい。貴重な同人誌を読む中で己を見つけてみたいです会費五百円でよろしいですか。よろしければ四月から会費を納めるようにしますので、お願いします。四月の例会は欠席させてください。わがままを許してください。敬具　（H．23．4．8鬼澤貞治）

五月分の会費同封致します。相変わらず古代（おこし）別便で送りました。（中略）第三金曜日、なかなかとれません。文化センターの方が休みになればと思っています。休みの時は七月のお盆です。（H．23．5．12小山陽也）

『白金葭』に加えていただき、俳句の楽しみがふえました。毎号、大変興味ぶかく読んでいます。一号「お便り広場」の

「秋いろはるひもせすまで急ぎ足」（彰一）がいい。惹かれました。軽快、秋の気韻をつたえ、秋思が籠る。”いろはにほへと”の万太郎も顔色を変えたでしょう。英訳いや英語の原句が、又、いい。

Autumn dusk comes fast-allegro!“abc”to“xyz”

釣瓶落しのテンポそのもの。太陽神の馬車の駆足が聞こえるようだ。茜の空が見る。作者はフランク永井を引き合いに照れるが、インターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙掲載もむべなるかな。

秋色は酔ひもせぬまで急ぎ足　　飯　三圃

（H23.5.23飯　三圃）

受贈誌（五月号）・受贈句集

九頭竜の竜めく雪の襞幾重　（薊80号）　森下流子
手を開げ紬の袷吊られあり　（〃　）　〃
耕に先づ黒々と堆肥積む　（〃　）　直江かず
耕して心豊かな日となれり　（〃　）　〃
尋常小学校唱歌と永遠の桜かな（雷魚86号）増田陽一
霜の夜のひりひり熱き仕舞風呂（杉486号）　吉羽多美子
除夜の湯に茶の間のけはひ楽しめり（〃）　倉田紀子
胸に背に赤児を括り火を渡る（5／1高幡不動記念俳句大会金子兜太推薦）　佐藤宏之助
鳴かないで空を見ている青蛙（亜2011．5）青木啓泰
種物が動いて町に人が出る（鶏鳴11）　〃

同誌に加藤木紫蘖さんの紹介がある。九十六歳にて健在、ダイヤモンド婚を越えた俳人。西東京に圓子さんという九十三歳の誓子門の方を存じ上げているが、同門である。本誌の宏之助さん、私も同じ。

花火終へ　花火師闇の中帰る　木紫蘖
雪原に一大木が青く立つ　圓子
夜勤終へ看護婦雪の道帰る　高志
山伏が抜刀一気に火を渡る　宏之助
花の下べつかんこうの忿怒像（白波NO31）　青木啓泰
惣の芽に三歩離れて思案する（〃　）　小林しげる
春暁の雲水二の腕細きかな(あすか)　山尾かづひろ
春の地震どつと白髪の増ゆるかな（〃）　野木桃花

・「畳」堀内一郎著（一九九一～二〇一〇）二五〇句

仏法の蝉聞きながらさりながら
一二月八日草むす屍かな
湯豆腐と言ふ人情は涸れにけり
白足袋のすりあしで来る卯波かな
春宵一刻Ｂ２９の巨き翼
秋の風グランドゼロをつつ抜けに
曾孫生れ枯木に花を咲かせたり
長寿眉と言はれその気に万愚節

・俳壇抄451誌が送られて来た。マルホ㈱のボランテイア.

「萱」吟行句会（5／13旧古河庭園）

とりどりのばら咲き誇る雨上がり　英子
園内をめぐる馬車道若楓　良子
腹ふくる鳩とことこと椎の花　義子
棚曇る名庭園の通し鴨　トシ子
楓の実風に吹かれて池に落つ　敦子
薔薇五彩後ろは黒き石館　一艸人
薔薇園の香りに倦みて心字池　高志
ドイツから来て芳香の青き薔薇　敏子

俳句評論纂

☼「杉」三月号を敏子さんが多美子さんから借りてきたものを見た。創刊四十周年森澄雄先生を偲ぶ「杉」のつどい・講演として、金子兜太の「森澄雄の頑張り」と題した講演録を読んだ。森澄雄は近世文人意識の立役者であった芭蕉や蕪村を評価した安東次男に共鳴して、そこを基本に俳句を作って行ったのだとする見立てである。「花眼」、「浮鷗」の

磧にて白桃むけば水過ぎゆく
秋の淡海かすみ誰にもたよりせず
雁の数渡りて空に水尾もなし
夜寒かな堅田の小海老桶にみて
白をもて一つ年とる浮鷗

などは文人意識が作らしめたとする。そして、兜太、龍太、澄雄の鼎談は三者三様で、澄雄、龍太は伝統派とか新古典派とか言われていたが、二人は基本的に違っていたと云う。その差は文人意識があるかないかであると。病に耐えていくうちに、万葉風の「ますらをぶり」を口にして自分に言い聞かせていたのだ。

われもまたむかしもののふ西行忌

　これを矢島渚男が、日本史的に批判したことは有名になりました。孝三さんのご意見も伺いました。以下は筆者の見立てです。文人意識と云うのは、田舎から上京して独立した文人としての意識であり、それを肚構えに持っている意識です。まして先の大戦を生で経験しているし、生家の宗教問題も体験しているもののふ意識がある。芭蕉はまさに武士の落ちこぼれでしょう。与謝蕪村とてそうでしょう。中江藤樹とか、本居宣長、明治には正岡子規、森鴎外など肚構えに文人意識が流れている。私の郷里の井伏鱒二とて同じ。鱒二と龍太は親友だったと聞くと、兜太の見立てが

揺らぐが、飄々とした柔らかさが響き合ったのではないか。山口誓子先生もそういう面があった。近くにゐて私はそれを感じた。余計な口は聞かなかった。金子兜太は毎年我孫子の真栄寺にて講演をしていたので、毎年聴いた。何時だったか、そう、小泉総理時代に、弱肉強食という言葉を、顔を真っ赤にして全否定された。非常に怒っている瞬間を目にして、私はこの人も、もののふだと思った。心底は優しい大和心が流れているのだと思って、ほっとしたことを覚えている。

☼ 雷魚63号（05／7）の中の座談会記録を陽一さんから貰った。八田木枯、亀田虎童子、小宅容義の鼎談録。飯田龍太引退の頃の話であり、それから誘引された現役限界説、老いと俳句など、ランダムな話が記録されている。三橋敏雄と高柳重信の仲が語られ、敏雄の句集で頂点は「真神」であるとは大方が認めているとか。

☼雷魚71号から連載の「スラウエシ島蝶採集記（一九九二～二〇一一）増田陽一著を著者より戴いた。

蝶の名がカタカナで書かれており、よく覚えて居られるに一驚すると共に、蝶採集の本番の合間に入る逸事にユーモアが滲み出て、非常に面白く読んだ。「五月雨や鳰の浮巣を見に行かむ」と云ふかるみを少ししたりに似て、日本から南洋のスラウエシ島にわざわざ蝶を捕りに行くかるみの旅行記の感あって、俳人ならその機微を解すると思われるのでお読みになったらいいと思います。ダーウインより前にウオーレスが探検して『マレー諸島』を著し、そこを陽一さん達が踏破したのだ。陽一宅の蝶標本を見せてもらった記憶、それに千駄木の虫の館の標本の印象が甦ったが、もう一度位は千駄木にお邪魔したいものだ。備後弁で「べちゃべちゃ、たあまばーくって」と云うのがあるが、インドネシア語でお喋りするを「べチャラ」と言うのも面白いと書かれているのは、そこに淵源があるのかと思った。これは余談ですが、こういう横道談が面白いのです。

原稿募集

・句会報の中から一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。鑑賞文は二百字を目途にお書きください。・俳句特別作品は十句、評論、エッセイなどは1ページ(千字)以内、連載できます。挿絵・写真もお寄せ下さい。

我孫子日記

4／29 85回国展*（六本木）5／6品川・八重洲。5／11 SOA 5／13旧古河庭園(萱吟行句会)5／18 SOA。5／20 アビスタ（白金葭例会）5／22小岩5／25 SOA 5／26

＊＊久寺家中。5／30有楽町6／1SOA。合間は水泳、播種箱水遣り、苗移植など菜園事。

＊ 陽一さんのGerminal，11-1を見た。ジェルミナルとはフランス革命暦の三月～四月を指す。生命胚胎、発芽の季節。よくよく見るとモアレが効いて、そう見えてくるのであった。

＊ ＊しろみ そらさんを敏子さんのピンチヒッターとして、俳句授業をこなした。初めて句会を行ってみた。九十分、三十人を二班に分けての句会は時間切れ。次回は発表会とすると言い置いて帰った。途中そらさんと珈琲談義にて歓を尽した。話の中で、孝三さんから貰ったツタンカーメンの種豌豆をお裾分けする約束をした。私は豌豆とスナップ豌豆を栽培していますが、毎年一杯取れるので、知人に差し上げています。左は今年の返句です。

豌豆の円ら皓歯とまた会へる　　孝三
てんこ盛り幼がせがむ豆ご飯　　〃

編集後記

大地震以来胸のもやもやがとれません。福島の原発がメルトダウンして真っ赤になった溶岩みたいな塊から放射性物質を出し続けていることが気になります。重さの単位がニュートンとなってまだ二十年くらいですか、ニュートン物理学は、人間の感覚や生活感で理解できる科学です。重さを一貫、二貫、と云うのを克服して、10kg、100kgと言っているのを、98N，980Nと云うのは、私にはまだ抵抗がありますが。まして、何ミリシーベルトとか、ベクレルとか、西洋人の名前を冠した放射性物質の発散密度を言われても、実感がなく、今後何十年も生きておれないのだから、いいやとなります。原子力はニュートン物理学では理解できない科学です。我々の日常感覚では理解できないものです。だから、なんだか怖い存在だ。放射性廃棄物が何万年も何十万年も収束しないとか、気が遠くなる。そういう現代に生きていると云うこと、まじめに考えると、頭痛がおこります。未来の人のことを考える余裕は、現代人にはほんとのところないものです。

芭蕉のかるみ以後（一）

光成高志

『炭俵』を代表する「梅が香の巻」を解釈して、かるみの芸境を探る。芭蕉と門人志太野波との両吟で、元禄七年春の興行とされる。

1 むめがゝにのつと日の出る山路かな　　芭蕉(春)

[朝まだき山路を行けば、突如視界が開けて、団々たる朝日がのぼり初めてきた]

2　処(ところ)ぐに雉の啼きたつ　　野波(春)

[梅が香漂ふ山路のかなたこなたに雉が勢いよく啼立ててゐる]

3　家普請(やぶしん)を春のてすきにとり付いて　　同(春)

[春の農閑期を利用して、家の普請に着手する。付近の山では、盛んに雉が啼いてゐる]

4　上(かみ)のたよりにあがる米の直(ね)　　芭蕉(雑)

[家普請にかかる折も折、上方からの便りが入って、米の値上がりを伝えてきた。農家にとって幸先がよい]

5　宵の内はらくとせし月の雲　　同(秋)

[宵の内ばらついてゐた雨はあがったが、まだ月に雲が残って、落ち着かぬ空模様である。この不安な天候では、この秋は不作であろう。上方の便りでは、それを見越してか、米の相場がもう上ったそうな、と嘆く庶民の心境]

6　藪越(やぶこし)はなすあきのさびしき　　野波(秋)

[ささやかな藪を隔てて、両側に住む者同士が、夜空の雲行きを気づかいながら、秋の心細さを語り合ってゐる]

[　]に入れた訳文は大意。原句に付したルビは訳者が付けたもの。文芸読本　松尾芭蕉(昭和五十三年1978)p200～201より転載。初折の表6句を示した。

むめがゝの発句の眼目は中七の「のつと」の一語である。これを、基角が、「すつと」、「きつと」と置いてもいいのではと言ったのを、去来は旅寝論の中で、此処が句の主なのに、きつと、すつとは、きつともすつともせず、尤も見苦しく、晋子(基角のこと)これを学ぶ事なしと述べて批判している。「のつと」という俗談平話の言葉を用いて早春昧爽の気を描いた。夜明け前、薄暗い山の道を歩いている。梅の香りが漂い、馥郁としてすがすがしい。そこに「のつと」朝日が昇ってきた。太陽の光に梅の花が照らされ、春の華やいだ季節をいっそう感じたのである。季語は梅、季節は春。時間は夜明けの時刻である。

この句の感動の中心は「のつと日の出る」にある。「梅が香」を山路に漂わせることにより、日の出前には梅がまだ見えない状態で梅を嗅覚でとらえる効果を出す。さらに、日の出後には梅が見え、梅を嗅覚・視覚両方でとらえる効果を出している。日の出前のモノトーン、日の出後のフルカラーの情景を同時に内包する、春の夜明けを詠った句である。

日の出により鮮やかな色の世界へ変わる情景への感動が主題である。

炭俵は芭蕉晩年のかるみの代表的撰集として知られている。かるみは「浅き砂川を見る如く、句の形・付心ともに軽きなり。」と比喩を持って示しているので、連句を書き写して、さらさらとして清く滞らぬ姿、謂わば、春の小川はさらさら行くよ、の様を味わいたい。啓泰さんの俳句工房はそこにあると昨年冬コメントがあったのを覚えているからである。

白金葭　第三号　平成二十三年四月発行
編集・発行人　光成高志（ＦＡＸ　〇四-七一八七-一〇六八）
発行所〒二七〇-一一一九我孫子市南新木二-十四-十七

2011/5/27　手賀田圃/遠くのビルは千葉ニュータウン